

太陽にむかつて飛ぶ鳥の群

大西 健太郎

なんとか広場までやってきた

まだ陽も昇らぬうちから どよめきがあふれている

いくつも袋を担いで横切る 大きな影

忙しく飛び交う 聞き取れない言葉

鼻を刺す スパイスの香り

茜色の毛並みにくるまれた腕が

薄暗闇の中 動いている

暗がりの方々へ注意を払う瞳

「うっかりしているとぶつかるぞ！」

「あつちからも飛んでくる！」

「気をつけろ！」

ホコリ 油 泥水のおい

服にも 髪の毛にも 体中にこびりついた

誰のものともつかないシミを 指先がたどる

広場の宇宙に手をかざす

どこから来て どこへ行くのか

数えきれない大勢のひとが

指のすき間を通り抜けていく